

新潮文庫

広場の孤独

堀田善衛著



新潮社

広場の孤独

定価70円

新潮文庫

昭和二十八年九月二十五日 発行
昭和四十二年八月二十日 二十刷改版
昭和四十三年十一月三十日 二十二刷

著者 堀田善衛

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話東京二六〇局一一二(大代)
振替東京八〇八番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

新 潮 文 庫

広 場 の 孤 独

堀 田 善 衛 著

広場の孤独

Commit〔A〕（罪・過）など
を行う，犯す……〔B〕託す
る，委す，言質を与える，危
くする，危殆に陥らしめる…
……〔C〕累を及ぼす……
That will commit us. それで
は我々が危くなる……

（研究社・新英和大辞典・第十版より）

一

電文は二分おきぐらいに長短いりまじってどしどし流れ込んで来た。

「え——と、〈戦車五台を含む共産軍タスク・フォースは〉と。土井君、タスク・フォースってのは何と訳すのだ？」

「前の戦争中はアメリカの海軍用語で、たしか機動部隊と訳したと思いますが……」

「そうか。それじゃ、戦車五台を含むタスク……いや敵機動部隊は、と」

副部長の原口と土井がそんな会話をかわしていた。木垣は『敵』と聞いてびくつとした。敵？ 敵とは何か、北鮮軍は日本の敵か？

「ちよつと、ちよつと。北鮮共産軍を敵と訳すことになっているんですか？ それとも原文にエネミイとなっているんですか？」

東亜部兼渉外部長の曾根田は、何かというと渉外関係を円滑にするため、という名目で外人記者その他を社用と称して待合へひっぱってゆくところから『お社用部長』という仇名^{あだな}で呼ばれていたが、戦争中サイゴンで仕入れたというしゃれた防暑服に派手な模様入りのストッキングをは

いた足を机の上に投げ出したまま、ちらりと木垣、原口、土井の三人を横眼で見、

「前後の関係をよく見極めて適当に訳しておいてくれ」

と云ったかと思うと、すっと立って裏口から編集局を出て行ってしまった。ドアがぱたんとしまったとき、吐き出すように、

「あれだ、お社用め、何だかびくびくしてやがる。前後の関係をよく見極めて、か、ハイ、シャヨウですかだよ、莫迦莫迦しい」

と云ったのは、平素口数の少い三十か三十一の御国の声であっただけに、木垣はふいとふりかえって御国の顔を見詰めた。しかしその顔には別にこれといった表情もなく、既に先程から辞引片手にかかっていた、難解なマックアーサー声明を訳しつづけていた。木垣は何となく、この御国という青年は党員じゃないか、と直感的に考えた、しかし、この反動を以て鳴る新聞社の、それも渉外部に党員がおいである筈は、まずないであろう……。

そう考えて木垣もまたさっきからかかっている夕刊用の長い香港電報の翻訳をつづけた。その電文の要旨は、如何に中共が香港、澳門などを通じて戦略物資の買付けに努力を集中し、かつは台湾からさえ石油製品が中共地区へ密輸されていることなどを報じて、朝鮮戦乱勃発とともに、次第に困難なものとなって来た中共承認済みの英国の立場を、一層ぬきさしならぬものにしようとする、一種意地の悪い底意の感じられるものであった。訳しながら、ふと彼は電文中の commitment という言葉にぶつかって鉛筆をおいた。夕刊第二版のメ切りまで後わずか十五分くらいし

がなく、手を休める時間のある筈はなかったのだが、それでも彼の眼と頭はその言葉に吸いつけられていった。Commit——罪・過ナドヲ行ウ、為ス、犯ス、……ニ身ヲ任セル、危クスル、言質ヲトラレル、引キ渡ス——翻訳機械のようになった頭は、この言葉にあてはまるべき訳語を次から次へと自動的にひき出していったが、その自動作用が漸時弱まってくると、彼は、いまこんな仕事をしていること自体、それは既に何かの Commitment をしてしまったことになるのではな
いか、という、背筋に或る冷いものの流れるような反省が湧き起って来た。それはいまにはじま
ったことではなかった。しかし、いま、北鮮共産軍をやみくもに『敵』と訳するかどうかという
議論のあった後だけに、コミットメントという一語は鋭く彼の虚点を衝くものを含んでいたの
だ。しかし、とにかく切りが切迫している。彼はぐいと唾液を飲み込んで再び先を訳しはじめ
た。訳し終って原稿をボーイにもたせてやり、椅子の背に身体をもたせかけると、背後で、

「……Gotta goodie, Doi ?」

というメリケンスラングが聞えた。

「None, none, everything's bad !」

何かいいニュースがあるか、なんにもありません、というわけであるが、話しかけた方は顔つきからして、如何にも幼い頃から味噌汁をすすり、畳の上をはいずりまわって育ったに違いない
どす黒い面相なのに、汚らしいアメリカのスラングを使い、黄と緑のアロハシャツをひらひらさ
せていた。話しかけられた土井は二十七、八歳の二世だが、戦争中憲兵隊の通訳をしたため（こ

れもまた一つのコミットメントだ……) 米国へ帰れなくなった、まだ少年とも云うべき渉外部員である。二人はつづけてあたりかまわぬ米語で女の話をはじめ、二人とも外国人風な身振りと眼や肩の動かし方を真似て大袈裟おおげさに笑った。二世の土井少年の方は、それでも不自然でなかったが、皺だらけな日焼け顔のアロハシャツは、猫が片手をあげてふざける時のような甘たれた表情で、しきりに戦争中マニラで買った女が如何によかったかという話を、云い廻しに困るとスラングで誤魔化しながらつづけていた。

夕刊第三版メ切り間際に、低い、下腹にひびくような、号外発行を知らせるブザーの音がして急に政治部のデスクに人がよっていった。共産党弾圧の政府発表があったのだ。副部長の原口は、すぐに電話をとり上げ、人をはばかりような声でいまの弾圧をめぐる裏話や朝鮮の戦況の悪いことなどを誰かに報告し出した。恐らくは政界か財界のボスに情報を提供しているのであろう、と木垣は思った。原口は一応その電話を切ると、すぐにまた受話器をとってある雑誌社にかけ、時局解説が出来ているから取りに來い、と云い、受話器を置くや否や、

「ボーイ、ます目の原稿用紙！」

と呶鳴どなってボールペンで荒々しくその時局解説なるものをなぐり書きに書き出した。原口は、身体の大きな西洋人だけに似合う筈の、根の形がそのままむき出しになった巨大なパイプをくわえ、濃い煙を吐きつづけに吐いて猛烈な勢いでペンを動かし、三十分もたたぬうちに十数枚の原稿を書きとばした。木垣はその原稿が活字となり、何十万部か刷られて日本の隅々まで滲透しんとうして

ゆく光景を思い描いてみた。しかし、何も雑誌ばかりではない、木垣自身が朝からつづけさまに訳しつづけて来た新聞記事すらが、無署名なるが故になお一層動かし難い真実として人々の眼にうつるのではないか。彼は再び、コミットメント、という言葉を考えて、

「やっぱりだ……」

とふと呟いた。

そこへ会議室から編集総務が電話で渉外部、東亜部全員と論説委員などの朝鮮戦争対策を議題に連合会議をやるから、デスクは一応木垣にあずけて、全員会議室へ来い、と云って来た。

どやどやと十一、二人の人間が引きあげていったが、その間約三十分、不思議にさして重要な電文も電話送りの記事も来なかった。木垣は机の上に足を投げ上げて考え込んだ。

「——やっぱりだ……」

しかし何がやっぱりだというのか。彼は二年前にS新聞社をやめ、以来京子とともに翻訳の下請仕事をやったりして細々と生計をたてていたのだが、それが、朝鮮に戦争が勃発すると、各新聞社ともに東亜部及び総司令部の戦況発表を扱う渉外部が急に多忙になり、人手不足になったところから、この新聞社に臨時手伝いとして呼び出されたのであった。

二年前、彼がS社をやめた時の、そのやめ方については彼自身かえりみてやましいところは殆どなかった。戦後に発足した新興紙のS社は忽ち^{たちま}経済的危機に見舞われ、出所のあやしげな資本を導入しなければやってゆけない状態にたちいたった。従業員組合は連夜十時頃まで大会を開い

て新資本を呑むか否かを議論した。勿論勢いの赴くところは既に明らかであった。その最後の大
会の、ぎりぎりの採決に入る直前、二十六、七歳の若い文化部の記者が立ち上った。

「緊急質問をいたします。それでは委員長は、われわれをあゝの呪うべき戦争に迫りやり、しかも
戦争で肥え太り、いままた虎視眈々と復活の道を狙っている追放資本をわが社に入れ、その資本
の代弁者が重役として入って来て編集方針に容喙するという、そういう最悪の条件を認めよ、と
云われるのですか？ 何も根拠はありませんが、その資本は、いま疑獄事件として法廷に持ち出
されているS電工事件関係者から出たものという噂がありますが、どうなんですか、その点緊急
質問として伺いたく思います」

独 孤 の 場 広

思えばあの頃から、この国の社会は底の方で揺れ出したのだ……。この質問に対して委員長が
何と答えたか、木垣は既に忘れてしまっていた。恐らく忘れるしかないような、何の具体性もな
い返答であったのであろう。営業部や広告部、もちろん編集局内部さえも『いまさら追放資本だ
なんて、若い奴は困ったものだ。あいつ黨員じゃないのか』そういう声があった。質問をした青
年はもちろん共産黨員ではなかった。木垣も一時は入党するのが自然だな、と思っていたのが、
突然カトリック信者になって人を驚かせた青年であった。木垣は大会では殆ど何一つ発言せず、
新資本が入り、S新聞が一般紙たることをやめて経済記事専門の新聞になったので、当時文化部
系だった彼はすることもなくなった、としてやめたのであった。何も旗幟鮮明に追放資本導入に
反対だったからではない。はっきり云えば、京子との同棲生活のため、家の問題、いや部屋の問

題で困っていた際なので退職金が欲しいという、ただそれだけのことだったかもしれぬ。その時退職した人々は二十数名あったが、恐らくはつきりと追放資本の導入に反対する、としてやめたのはあの質問をした独身で親がかりのカトリック青年だけだったといっている。

人間は機械化された社会にあっては、生活の喜びを失う、という人がある。その通りかもしれぬ。しかし、次から次へとテレタイプが海外から送りつけてくる電文を翻訳し、白ゲンと呼ばれる紙切れに訳文を叩きつけてゆき、それが直ちに印刷される、その輪転機の、にぶく足許にひびいてくる唸りを身体に感ずることは、戦慄と云ったら云い過ぎるかもしれないが、そこに一種異様な肉体的な喜びめいたものがあることは否定できない。二年間の浪人生活中、四六時中世話になり放しの、S社時代の幹部だったT氏を通じて、いまのこの社から呼び出しがあったときにも、木垣は様々に考えた。しかし、輪転機の、あの唸るような呼び声は彼の心の奥の、或る脆い部分をゆさぶるかえし、日本が完全に独立するまでは、新聞にたずさわるまいという、誓いみたいなものをどこかにひっこめようとさえ、彼は努力したのであった。そして……T氏の好意を無にしではならぬ、たとえばほんの一時だけでも出なければならぬ。と、都合の悪い部分はT氏のせいにし、いわば一種の事故ということにしてのこのこと出かけてゆき、惨烈な戦争の報道を煙草をふかしながら翻訳して、今日で十日目であった。そして彼は呟いていた――

「――やっぱりだ……」と。

受付から電話が来た。

「OA通信の外人の方がおいでですが、渉外部さんは会議中でしょうか？ どうでしょうか？」

咄嗟に木垣は、

「お通ししろ」

と答えて自分ながら驚いた。臨時手伝いにすぎぬ彼は、責任のある問答の出来る立場にない。

しかし日本人以外の人間、殊に戦争の当事者たる米国人がこの戦争を、ぎりぎりのところどううけとっているのか、本人の口から聞いてみたいという欲望はあまりにも強かった。彼はその記者を待つあいだ、隣の外信部のデスクにつんであった外国の新聞を一枚とった。表題には *Gazette de Genève* とあり、スイスの新聞であった。日本の新聞より一まわり大きい紙型に、のんびりと形のよい活字がならんでいた。日本の新聞は、如何にも活字がつまっているという感じであるが、このスイスの新聞は、独仏二カ国語で表裏に同じ記事を扱っているようであった。たとえば *«Corée»* というフランス文字が大きく出ていても、それが、彼が毎時毎分扱って来た *«Korea»*

とか *«朝鮮»* とかと同じ意味をもった言葉とは思えなかった。

——のんびりしてるように見えるな。

と思って第一面をのぞき込むと、そこは文芸欄で、パリーの文壇消息のようなものを伝えている。《サルトル氏、再びモオリヤック氏と論戦》という見出しが眼についた。木垣はこの世界的に有名なサルトル氏の作品は何一つ読んだことはなかったが、それでも興味を覚えて読み出し、途中で足を机から下し、緊張した姿勢にかえった。

それは文壇ゴシップというにはあまりにも露骨なものであった。サルトルがジャン・カスウ、アンドレ・ジイド、ヴェルコウル、アラゴン、ジャン・ゲーノなど、左翼乃至進歩的といわれる作家詩人たちとともに、フランス政府に中共を承認させ、中共の国連加入反対を停止せしめ、国際関係の緊張の緩和に貢献し、印度の平和維持のための努力を援助する目的で、平和と独立フランスのためのアッピールを提唱したところ、カトリック作家のモオリヤックがこれに喰ってかかった、というのである。木垣はこういう云い分に喰ってかかるとは、一体モオリヤック氏にどういう云い分があるのか、といささか不審に思った。モオリヤック氏の云うところは、今に及んでフランスの独立などとはとんでもない言葉遣いである。第一米国防省が独立という言葉をフランスの分派行動のあらわれと見たら、結局フランスはソヴィエト機械化師団に蹂躪されてしまうであらう。もし、サルトルやジイドに、いまなお自由人として生き自由人として死に、自ら真実と信じるところを考えかつ書く機会と自由があり、自ら独立フランス人と称することが出来るとすれば、それはアメリカの武力を背景とする国際連合が、彼らの書齋を守っているからだ。仕事が出来るといふことが、そもそもアメリカのお蔭なのだ。中共の国連加入だの、フランスの独立だのと云ってアメリカの対仏不信を招くのは、怖るべき錯誤である……

木垣はこれと同じような議論を、スイスやフランスではなく、この日本の総合雑誌でも何度か読んだことがあるような気がした。モオリヤック氏の言葉のうち、フランスというところを日本と置きかえれば、あれはそっくりそのままではなかったか……。木垣は時々自分でも、おれはナ

シヨナリストかしら、と疑うことがあったが、彼の心のうちには、国の独立と精神の独立とは不可分の関係にあるという、偏執概念のようなものがあった。

むき出しのセメントの床は、地下室にある五台の輪転機がフルに動き出したので、ディーゼル船のようなかすかな震動をはじめた。もし新聞に、世の難題が次々と解決され人々の不安を鎮めるような良いニュースばかりがのっているものなら、この震動をどんなにか心よく味わえることであろう。〈新聞よ、飛べ、平和の鳩のように〉とはいつかの新聞週間か何かの標語である、木垣はふとそれを思い出し汗をぬぐいながらも背筋に冷いものを感じた。

——寒々とするようなことばかりだ、この暑いのに。

寒々とする、そう頭の中で云ってみると、先程から *commit, commitment* と気にしていたことが、モオリヤック氏の云い分に接して一度にはっきりして来た。いま彼が手伝っている新聞の立場は、これを比喩^{ひゆ}として云えば、明らかにモオリヤック氏の側である。そしていわばサルトル、ジイドの立場に立った雑誌が、その立場の故に出なくなったという噂^{うわさ}を二、三日前に聞いたことが思い出された。

——この新聞の手伝いをしているという事実は、個人的な考えの如何に拘^{かか}わらず、一切の他者に対して、明らかにこの自分自身がモオリヤック氏の立場に立つカテゴリーの中に入り、これを支持する、つまりそういう風に一步踏み出したことを意味する。

木垣はまた汗をふいた。そして先夜、戦後彼が上海で抑留^{シヤンハイ}されていた頃に知り合った、国民党

系の中国人記者、張国寿と一緒に横浜へ行ったとき、所謂特需景氣に酔いどれた労働者たちを見たことを思い出した。張国寿がそれを見て、見給え、やはり日本人は戦争を喜んでゐる、と云ったことも思い出された。成程労働者たちは、懷ろが温そうで景氣よく酔っていた。しかし、その顔には、張チャンの云うような、あけはなしな喜びや満足の表情があるとはうけとれなかった。彼はまた、

「あの爆弾なァ、いくつ目だったか忘れたけれど、ひょいとかついだら肩でつるりと滑りやがるんだよ、おれァ、ほんとにひやつとしたぜ」

そんな会話を聞きつけた。その労働者の眼に木垣は、不安、不満、またしいて云えば或るうしろめたさのようなものも感じた。それは木垣自身の氣持の反映にほかならなかったかもしれないが、しかし爆弾をかつぐことによつて、彼らもまた内心の如何に拘らず一步限界を越えたのではないか。だが、限界とは何か。新聞社などに出ず、つまり社会組織の中へ現実に入らず、これまで二年間のように、家にこもつて探偵小説、通俗小説、冒険物語から大戦記録など、手あたり次第、金になり次第翻訳することが、限界を越さず手を清くしてすごすことか。そんなことはありえない。彼の家の近所に住む人で、共産党の新聞に籍があつたために追放されたKという人が、木垣のところへコーヒーやチーズ、バター、石鹼、衣料など、米国品や英国品の行商に來た。その人は来る度にこれは闇やみの品物ではない、正規の放出品である、と云つた。弁解がましいところはちつともなかった。しかし、如何に安くて良質であろうとも、それを売られることはやはり民族産